

Title	高倉徳太郎の生と死をめぐって：一信徒としての立場から
Author(s)	鵜沼, 裕子
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.50, 2011.3 : 134-150
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3128
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

高倉徳太郎の生と死をめぐる

一信徒としての立場から

鵜沼裕子

高倉徳太郎は、近代日本のいわゆる第二代目のキリスト者であり、植村正久を継承する、「日本基督教会」の代表的な指導者として名を馳せた人物である。しかしながら、高倉に関する研究はまだ極めて少なく、⁽¹⁾ことにその自死については、没後二〇年近くを経た一九五〇年代まで公にされず、従って論議の対象ともならなかった。死生学は私には門外であるが、本論では、その少ない研究資料と、高倉自身および周辺の人々が書き残した文書、また生存する間接的な関係者らの証言等を手がかりに、私なりに「牧師・高倉徳太郎の生と死をめぐる症例」をまとめて、死生学専門の先生方による研究の素材として提供したいと思う。

I 信仰と思想

初めに、高倉徳太郎の生涯と彼のキリスト教理解の特質について、本論に必要な範囲内で一応略述しておく。⁽²⁾

(1) 生涯

高倉徳太郎は、一八八五年（明治一八）、京都府何鹿郡綾部町字南西町一〇一番戸に、高倉平兵衛・さよの長男として生まれた。徳太郎が五歳のころ父母が離縁し、九三年に第二の母・起美子が入家したが、この母も六年後に急逝し、その翌年には起美子の妹・千代子が第三の母として入家している。『高倉徳太郎伝』の著者・小塩力は、生母との離別が父への反抗、母なるものへの憧憬として徳太郎の生涯に影を落としたであろうと推測している。

一九〇六年、金沢の第四高等学校を卒業して東京帝国大学法科独法科に入学するが、在学中からキリスト教に傾斜し、同年、富士見町教会で植村正久から受洗した。そして、植村が設立した東京神学社に学び、富士見町教会の伝道師を皮切りに、伝道生活に入った。一二年、世良専子と結婚し、一男四女を得た。

一九二一年（大正一〇）から二四年までイギリスに留学し、エディンバラ、オックスフォード、ケンブリッジ等に学んだ。帰国後は、東京神学社（東京神学大学の前身のひとつ）の教師として神学の研鑽と伝道者の育成にあたるかたわら、自宅の集会から起こした戸山教会（現日本基督教団・信濃町教会）を拠点として、自ら唱導した「福音的キリスト教」の宣布にあたった。

一九三二年、明治学院神学部と東京神学社が合併してできた日本神学校の校長事務取扱に就任するが、このころから健康の不調を訴えるようになり、三三年四月一六日の復活主日の説教を最後に長期療養生活に入った。同年一二月、心身の衰弱が深まり、東大病院島蘭内科に入院、三月三〇日に突如退院したが、四月三日の早暁、西大久保の自宅で自死した。

(2) 「自我の問題」をめぐる

高倉徳太郎は、日本の近代思想史上、教養主義・文化主義・人格主義等と呼ばれる思潮が世を風靡した明治後期から大正時代にかけて青年期を過ごし、「自我の問題」という極めて内省的な課題を抱えてキリスト教に接近し、入信した。いわゆる「自我の問題」は、当時の多くの知的青年たちが共有した課題でもあった。高倉も、金沢の第四高等学校時代から「自我とは何か」という内面的な問題にとらわれ、その解決をキリスト教に求め、洗礼をうけるに至り、伝道者としての道に入った。

自伝的文章「祝福せらるるまで」⁽³⁾には、キリスト教に救いを見いだすまでの内心の赤裸々な遍歴の跡を読み取ることが出来る。それによれば、彼は自我の内部に巢喰うエゴイズムとしての罪との葛藤の末、自己否定の極限において、自我を超絶する「絶対他者」としての神によって自我が裁かれ解放されるという体験をくぐり、「信仰のみ」・「恩寵のみ」によって救われる、という信仰的地平に到達した。ここにエゴイズムに代わって神とキリストへの責任から行動する「福音的人格」が誕生する。さらにこの恩寵を広く客観化したいという欲求から文化の再生という課題と取り組み、自我の所産としての文化も恩寵による裁きを通して根本的に造り変えられ、ここに「超自然的恩寵の団体」としての神の国が実現するとした。その内容は、主著『福音的基督教』に体系化されている。⁽⁴⁾

II 自死に至るまで

(1) 鬱病の「要因」

小塩力の『高倉徳太郎伝』、女婿・佐藤敏夫の諸著述、後述の赤星進の論文、『信濃町教会七十五年史』等の関係記述を総合すると、高倉の鬱病の発症と進行に深く関わったと考えられるのは、晩年の高倉が負った、以下のような三つの課題であった。

第一は、信濃町教会での牧会にかかわる問題である。同教会は、一九二四年（大正一三）、高倉が大久保の自宅で開いた礼拝を起源とする。二五年（大正一四）に植村正久が急逝すると、富士見町教会の後継者をめぐる問題で、同教会から一挙に百名を超える会員が戸山教会に転籍し、戸山教会は、一朝にして質量ともに「都内有数の大教会の様相」（佐藤敏夫『高倉徳太郎とその時代』、以下『その時代』と略記、一六三頁）を呈することとなった。三〇年（昭和五）には信濃町教会と改称した。富士見町教会からの転会者には、英文学者・斉藤勇を始め各界の有力者も多く、加えて当時の信濃町教会は、山本和、石島三郎、福田正俊、宮本武之助、赤岩栄、小塩力など、後世に名の残るキリスト教思想家を数多く擁していたので、そうした信徒集団を率いるには相応の力量を必要としたであろうし、また説教には当然、高度の神学的素養が求められたと思われる。

第二は一九三〇年（昭和五）、明治学院神学部と東京神学社神学校とが合併して、日本基督教会立の神学校として日本神学校がに開校し、高倉がその教頭に就任したことである。合併の議が生じた当時の両校は、運営上、さまざまな問

題を抱えており、また新神学校が発足した後も、経営上の問題や、神学理解をめぐる関係者同士の見解の相違、運営方針に関する意見の不一致、またそこから生じた人間関係の軋轢などが高倉を苦しめたようである。

第三に、高倉晩年の活動の中で、彼の病との因果関係が最も深かったとされるのが「福音同志会」である。福音同志会は、高倉を中心に日本基督教会の改革を目指して立ち上がった青年有志により結成された集団で、主なメンバーに今泉源吉、浅野順一、伊藤恭治らがいた。ほぼ同時に、同会の主張を広く世に訴えるための同人雑誌『福音と現代』の発行が決定された。

同会は、初め同志による神学研究を目的として発足したが、その活動は、次第に日本基督教会の機構への内部干渉ではないかと危惧されるようになり、果ては高倉とその取り巻きによる「陰謀」（小塩力『高倉徳太郎伝』、以下『伝』と略記、二七二頁）とまで目されるに至り、これに高倉と同志らとの見解の対立も加わって、同会は次第に高倉の精神的重荷となつていったようである。この辺りの事情と人間関係の微妙な動きについては、小塩の『高倉徳太郎伝』に詳しい。

(2) 病の悪化から死へ

こうした状況の中で高倉は、一九三二年（昭和七）ごろから不眠や腸の不調などを訴えるようになった。その後彼の健康状態は次第に悪化し、三三年の夏には郷里・綾部に静養する身となつた。その間に彼は、神学校と『福音と現代』の責任を降り、九月には同誌はついに廃刊されるに至つた。小塩はこのときの高倉の心境を推察して、「高倉はこれらのことにおいて、審判をまざまざと見、自分の過去・現在・未来から力が抜け出るように感じた」としたためている（『伝』二七七頁）。ただし、小塩の『高倉徳太郎伝』はきわめて文学的な潤色の強いものであるので、この記述も、

裏づけとなる資料から高倉の信仰や内面に踏み込んだというよりも、著者自身の主観で書き流しているようにも思われる。概して、とくに病に関する小塩の記述には、事実を客観的に読み取ることが難しいと思われる部分が少ない。

それはともかく福音同志会は、「完全に急進派がイニシアティブをにぎり、独走した典型的なケース」であった。佐藤敏夫は、福音同志会の活動に一定の意義を認めつつも、高倉との関係については、「あまりに性急に事をはこぼうとし、運動を突りあらしめる慎重な配慮を欠いたために、運動の力学に翻弄され、生産的な結果を生み出さなかつたばかりでなく、一人の指導者を死に追いやることになった」（『その時代』二一六、七頁）と結論づけている。高倉を中心とする信濃町教会、日本神学校、福音同志会の三者の間の動向と、それが高倉の心身を蝕んでいった様子、またその間の彼の心境等については、『信濃町教会七十五年史』に詳述されている。

なお、すでに広く語られていることではあるが、小塩の『伝』に記されていることの中で一応触れておきたいことは、高倉と、信濃町教会女子青年会の有力メンバーの一人であった勝俣好子という女性との間に、恋愛感情が存在したということである。高倉はこの才気ある女性を特別に信頼して教会内の活動を委ねたが、そうこうするうちに彼女に対する「ゼールズルゲとおもっていた愛にいつしかエロースがしみこんでいた」、と小塩は書いている（『伝』二九一頁）。しかし、もしもこのことをめぐる資料が『伝』にあげられているものだけだとすれば、二人の間に生じた感情をエロースと断定することは無理であろうと思われる。いずれにせよ、この女性との関わりが高倉の自死に重大な関わりをもったと考えることは不自然であると言わざるを得ない。

さて入院加療や転地療養を繰り返すようになった高倉に対し、信濃町教会の長老会はきめ細かな対応を試みたが、三三年四月一六日の復活祭礼拝での説教が、高倉の信濃町教会での最後の説教となり、その後彼は長期療養生活に入った。三三年一二月には東京帝大病院・島園内科に入院し、⁵⁾ときに楽観的な情報も報じられたが、悲劇は突然起こった。

その最期について、『信濃町教会七十五年史』は次のように伝えている。

周りの親しいすべての人々の慰めの中で、それに対する深い感謝をもって、静かに穏やかに入院生活をおくっていた高倉牧師は、三四年三月末、突然自宅に戻った。四月一日の長男徹の信仰告白は、深い喜びと希望となったことであろう。高倉家にも久し振りに、ささやかな平和が訪れたかに見えた。

高倉牧師の死は、そこに突然起こった。

四月三日早暁、高倉牧師の変わり果てた姿を第一に発見したのは、愛嬢・光子である。(同書一〇六頁)

死因は縊死であったという。

なお日記の最後の日付は昭和九年三月二二日で、「春らしき光―これを受けたし―主の光をうけたし―」⁽⁶⁾で終わっている。なお、当時の日記の中で「死」をほのめかすような言葉としては、例えば次のようなものがある。

九月十一日(一九三三年)

朝、妻が礼拝の司会―キリストの来りしは、悪魔と呪とをこぼたん為めなり―。秋来る。寒し。十一日―時はたつ。何もせず、たゞアセル。じつとして居れぬ、後よりせき立てらる。あせることは死を、悪魔のさゝやきを意味する。主よ―平和を与え給へ。⁽⁷⁾

III 高倉の鬱病と死をめぐる諸家の見解

次に、高倉の病と死をめぐる論考の中から左記の二つを紹介し、併せて私自身の若干の感想を述べたいと思う。

(1) 赤星進の見解

高倉の鬱病と死の関係について、まず「うつ病と信仰——高倉徳太郎牧師の自殺をめぐる——」⁽⁸⁾と題する論文における赤星進の見解から見ていきたい。

赤星は、精神医学の立場から高倉の「家族歴および既往症」・「生活史」・「病歴」と病気の「症状」を述べた後、高倉の病気を「心因反応性うつ病」と診断している。そして、それに対して以下のような「精神病理学的考察」を行なっている。

赤星によれば高倉は、継母起美子の死後、「この母は自分がいじめ殺したようなものである」⁽⁹⁾という罪責感にさいなまれ、すでに高校時代から抑鬱症状に悩んでいた。そして、受洗、献身とその後の足跡においても、罪悪感はずっと通底音として高倉の生の中に響き続けたのであると、精神医学的な見地からの説明を試みている。そして、結局高倉は、「罪の値は死なり」と見定めて自ら死を選んだのであると考えられる、と述べている。

赤星は、高倉の贖罪信仰が彼を罪悪感から救い得なかつたのは、「彼が意識的には神の恵による贖罪を信じ、その点で多くの人々を鼓舞していたにも拘らず、無意識には人の情を期待しており、その方が究極的には彼の心理を支配して

いたためであると考えられるのである」と主張する。そして、高倉の自死の要因を福音同志会のメンバーの離反にあるとして、次のような解釈を示している。すなわち高倉は、意識的には神の恵みによる贖罪を信じ、「信仰によつてのみ救われる」と語りながらも、「無意識には、神との自己愛型一体感の原型である「人間との自己愛型一体感」を求めていたのであり……究極的にはその一体感に支えられて生きていた」。それゆえ、福音同志会との関係に亀裂が生じ、この一体感が失われたときに、高倉は発病し死に至つたのである。

(2) 佐藤敏夫の反論

高倉の女婿（高倉の四女・恵子の夫）である佐藤敏夫は、こうした赤星進の精神医学的な解釈に強く反論している。¹⁰ 佐藤の赤星論文批判の論点は、おおよそ以下の通りである。

まず佐藤は、今日では鬱病は肉体の病と同じく病気なのだ、という理解が一般的となつており、「心の病に対しては信仰が立ち向かうということは非常に困難」であるとの認識に立ち、信仰が人間を鬱病にかかりにくくしたり癒しやすくすることはあつても、「信仰をもてば、絶対に安全とか、必ずいやされるとは限らないはずである」と言う。そして①赤星のように罪悪意識と自殺とを直結させるのはあまりにも短絡的であると言ひ、②赤星は、高倉の鬱病発症の原因を専ら福音同志会との軋轢に求めているが、高倉の日記を精査しても、高倉の憂鬱や疲労が同志会の牧師たちとの不和によつて生じたことを示す証拠は見いだされない。同志会が高倉の重荷となつてくるのは一九三三年に入つてからのことであり、ここから高倉の発病が「同志会のせいではないことは明らかである」とし、そうであれば、同志会との「自己愛型一体感」の喪失が高倉を死に追いやったという赤星の図式は成り立たなくなる、と述べている。

私は、この両者の議論に専門的なコメントを述べる立場にはないが、素人の感想として一言すれば、赤星の立論は、精神医学上の理論をそのまま高倉個人の症例に当てはめたもので、説明としてはきわめて明快であるが、あまりに杓子定規な解釈で、率直に言つて生身の人間の心の裏に入りこめていないもどかしさを感じた。

しかし一方で、鬱病は心の病、気であり基本的に信仰とは次元が異なるので、信仰のみに鬱病の予防や完治を求めるのは無理である、とする佐藤の反論にも、直ちに同調しかねるものがある。信仰の場である魂の深奥と、精神医学から見る心の深みとは、決して別次元のものではなく、通底しあうところがあるのではなからうか。この点については専門の先生方のお教えを請いたい。ちなみに私の研究上の師である故・大内三郎は、親族としての佐藤の反論には、論文としての当否よりも、むしろ痛々しさを感じた、と述べていたことを付記しておく。

なお、高倉自身が自殺について書いた文章として、芥川竜之介の自殺（一九二七年）に際し、芥川の「或旧友へ送る手記」への感想として書かれた「自殺者の人生観批判」^①という短文がある。しかし、同文が書かれた一九二七年は高倉自身の鬱病発症以前であり、自殺がまだ自分自身の問題となっていないころのものであるので、今回の考察にとつて直接の手がかりにはならない。しかし参考までに一応簡単に触れれば、同文の趣旨は次の通りである。高倉は、芥川の人生観を「解剖的であり、唯物的であり、かなり皮肉な、なげやりなものである」と言い、死と戯れる人は「生とも戯れ得る人である」と批判して、人生の究極の意義は神の目的を実現し、神の栄光を顕すことにあり、我らの生は「誰に対してよりも先づ、父なる創造主なる神に対して厳かなる責任がある」と結んでいる。高倉自身が、自分は芥川作品をほとんど読んでいないと言っているので、これは芥川文学への理解を踏まえて自殺問題と向き合った文章ではなく、牧師・高倉としての正論を述べたという印象のものである。しかしこのように、神への不動の信仰に支えられつつ、一文学者の自死についてある意味で突き放した、冷淡とも言える感想を述べた高倉自身が、わずか数年後に、自ら命を絶つ

という状況に追い込まれたのは、皮肉であると同時に、そこには余人の想像もし得ない厳しい内的外的現実があったと言えるのではなからうか。

IV 鵜沼のコメント 一信徒としての立場から

(1) 信仰と病

高倉における信仰と鬱病の関係という問題についての私見を一言で言えば、高倉は信仰の弱さゆえに病に勝てなかつたというよりは、逆に「信仰のみ」に救いを求めようとした彼のあまりにも一途で純粋な姿勢が、彼を窮地に追い込んでしまったのではないかと考える。精神科医・平山正実は、キリスト者である鬱病患者から援助を求められた時の対応として、ひたすら主をたたえよと指導し勧告することがなぜいけないのか、という問いを立てつつ、次のようなことを述べている。「うつ病者は、たとえ健康な時は立派な信仰をもっている人であっても、病んでいる時は生のエネルギーが全体的に低下してきて、主をほめたたえることができなくなる。礼拝に出ることはもちろん、祈ることさえおっくうになる。そのような時に、ひたすら「主をほめたたえよ」と勧めることは、かえって病者の罪責感を増加せしめ、彼らを窮地に陥らせることになるのである」⁽¹²⁾。

まさにこの指摘に符合するような言葉を、死を前にした高倉の日記から拾おうとすれば、枚挙に暇がない。以下にその一部を挙げておく。

九月八日（金）（一九三三年）

昨夜は教会の事が心にかゝり殆んど眠れず……。何とてかく不安あるや。されどたゞ信ぜよ。信頼に生き、広き心にてキリストと友とに対せよ。

九月廿三日（土）

……ことに我々教職にありながら、肉に克ち得ず、主の僕たる生活なきは如何。口頭の伝道者たるは虚偽なり。良心的なる生活をなす。聖霊をとり去らるゝことなくあれ。聖書をもつともつと読む可きを思ふなり。

十月十八日（水）

……「罪人のために」を読み行く―我が現在を痛切に審判せらるゝ―余の生活にたびゝ行詰るは神偕ならざる為め、之ではならぬと思ふ……。このまゝではpastorたり得ず。life-changeがなされる可きなり。我が毎朝の祈はmy lifeのchangeの為めならざる可からず。

二月九日（金）（一九三四年）

祈り、生命。祈なきは死なり。祈なき罪を畏れよ。この戦に克たしめられよ。

二月十二日 福田正俊宛て書簡より

私は極度の不眠、神経を弱めし為めabnormalな心となることを恐れてゐます。どうか私の信仰と祈との

為めに切に御祈を願上ます。不眠つゞきの為めに祈がよく出来ぬときへあります。

三月十九日（月）

頭脳ばく然として過す。願ふ、正しく祈る心を与へ給へ、聖書を齎く心を与へ給へ、願ふなり、祈るなり。如何なる時にも感謝あれ。何事をも考ふる余地なくegoのみにて一パイとなる一困つたことかな¹³。

これらはいずれも、自らの信仰を鼓舞して病からの立ち直りを図ろうとする悲痛な言葉である。思うに高倉は、こと精神医療に関しては高レベルの手厚いケアを受けたにせよ、牧師という立場にある者として、心の内奥を全てさらけ出して援助を乞うような魂の看取り手は求むべくもなかったのではなからうか。偉大な指導者と仰がれ多くの追隨者を抱えていた牧会者として彼のなし得たことは、自らの描く牧師・信仰者の理想像に少しでも近づこうと自己を打ちたたくことしかなかったであろうと思われる。高倉は、福音同志会を初めとする四囲の状況に追いつめられたばかりでなく、自分で自分を逃れようのない場所へと追い込んでしまったのではなかったか。そしてそれはまさに、鬱病の治癒という観点からすれば、最悪の態度であつたのではなからうか。

(2) 日本社会の中での「個」の孤絶

前述のように赤星進は、高倉の自死の原因を同志との「一体感の喪失」に求めた。私としては今「高倉の孤立」を、福音同志会という特定の集団の中での孤立に止まらず、広く日本社会一般における問題に広げて考えてみたい。

かつて私は、間柄関係を重視する日本社会に「個の倫理」が入ろうとすれば、相当のエネルギーを必要とするのみ

か、「場の倫理」が支配する日本社会では、「場」の外に出ることはときに死を意味するものでさえある、という河合集雄の指摘⁽¹⁴⁾に教えられつつ、これを高倉の場合に当てはめて次のように述べたことがある。

高倉は、信任し依拠するに足るあらゆる権威を失って浮遊する個が再び定立すべき抛り所を、「絶対他者」としての神に見出した。……だが、そのような課題を負わされた個が現実の日本社会にしたたかに根を下ろすには、何よりもまず内と外との両面からの重圧に耐え得る強靱な個我が確立されねばならないであろう。……

高倉が置かれた状況の本質を右のようにとらえるなら、自死という彼の生涯の悲劇的な結末は、これを高倉という個人の自我のひ弱さ、未成熟さに帰すのは当たらないし、仮にそうしても、そこからは何の解決も得られないであろう。むしろ高倉の終焉は、日本社会で透徹した「プロテスタント主義」にもとづく個の倫理に徹することの難しさを、われわれに身をもって示したというべきではなからうか。⁽¹⁵⁾

死を目前にした高倉の日記の以下の一節は、彼の孤立が、単なる同志との絆の切断に止まらず、はるかに深い心の深淵に根ざすものであったことを暗示するもののように思われる。

三月三日（金）

朝十時、××君来訪―同志会の委員会と小生とのgapにつき語らる―余にとりては最深の淋しさ、苦みなり。最後のrefugeをもとり去られたることなり―而もこゝに主が余に対して与へ給ふ深き試みあるを思ふ。

〔略〕孤独―之れはたゞ主キリストに於てのみ満さる―主に支へられて雄々しく戦ひ、之れに克て―⁽¹⁶⁾

右の拙文は、すでに二〇年以上前にしたためたものであるが、私の基本的な考えは今も変わっていない。常に四圍の人々の気持ちに「察し」つつ自らの行動の仕方を決めることが求められる日本社会で、「全能なる神の前に責任をもつ」個としての倫理を貫いて生きることが、ぎりぎりの選択を迫られる場面では、社会から背き出て孤絶せねばならぬことを意味する。それは、ときに身内からさえ離反せねばならぬ内面的な淋しさに耐えることであり、また、四圍の理解を得られず社会そのものから孤立することを引き受けねばならない厳しさでもある。

高倉の場合、生来の気質や生い立ちの環境に起因する資質に、置かれた社会的状況や牧師としての強い使命感が加わって、進むことも退くこともできぬ窮地へと彼を追いやったのではなかったかと考える。大方のご感想、ご批判を請いたいと思う。

なおこの論考は、二〇一〇年四月一六日に、「臨床死生学研究會」（於・聖学院大学）で行った講演「高倉徳太郎の生と死」に加筆したものである。

注

(1) 本格的な高倉徳太郎伝として、雨宮栄一氏による『評伝高倉徳太郎・上』が二〇一〇年一〇月一日、新教出版社から出版された。下編は、二〇一一年三月一〇日に刊行されたが、本稿の攔筆時には未見であった。

なお、森岡巖『ただ進み進みて——キリスト服従への道』（二〇一一年二月一日、新教出版社）の「I 高倉徳太郎と日本基督教会」に、富士見町教会の「分裂」や「福音同志会」との関係問題など、本稿に関わりのある事柄についての詳しい記述があるが、すでに脱稿したあとの出版であったので、参照することができなかった。

(2) 伝記的なことがらに関しては、主として左記の書によった。

小塩力『高倉徳太郎伝』一九五四、新教出版社

佐藤敏夫『高倉徳太郎とその時代』一九八三、新教出版社

(3) 「祝福せらるるまで」『高倉徳太郎著作集1』一九六四、新教出版社、一八〇～二七頁

(4) このことについては、拙著『近代日本のキリスト教思想家たち』（日本キリスト教団出版局、一九八八）所収の「高倉徳太郎」（同書一八七～二六頁）で述べた。

(5) 高倉の入院先が精神科ではなく内科であったことについては、牧師として精神科で治療を受けることがはばかられたためではないか、と推測されている。

(6) 『高倉全集第十巻 日記・書翰』一九三七年一〇月、高倉全集刊行会、四二二頁

(7) 前掲書、四〇六頁

(8) 『臨床精神医学論集——土居健郎教授還暦記念論文集』一九八〇、同刊行会編、星和書店、二四八～二六三頁

(9) この言葉は小塩力の『高倉徳太郎伝』に出てくる。小塩によれば、継母起美子が高倉家に入ったとき徳太郎は、継子いじめ」をするものとの通念に対し、「逆にいじめかえしてやる」と思い定めて、手ぐすねをひいて待っていたという。そして、母子間に起こった次のようなエピソードを紹介している。「たまたま、小学校のある祝祭日のことである。おおくの児童が紋付を着てくることを、徳太郎は承知していた。起美子は、これを知らぬので、緋の着物を出した。徳太郎は、これを着て登校した。帰宅するや、かれは眼をつりあげ、あらんかぎりの罵言を、母にあびせた。その土地のならわしと、少年の謀略を、予知できなかった起美子は、泣いて己が嫁入り支度の折の紋付を裁断して、この子に着せた、という」。同様の逸話はこの他にも紹介されている。

(10) 「高倉の最後」『高倉徳太郎とその時代』一三章、一九八三、新教出版社、二一九～二三七頁

(11) 『高倉全集第六巻』五四二～五五四頁

- (12) 平山正実『心の病と信仰』一九九八、袋命書房、二二一頁
- (13) 前掲『高倉全集第十卷 日記・書翰』四〇六頁他
- (14) 河合隼雄『母性社会日本の病理』中公叢書、一九七六、他
- (15) 鵜沼裕子『近代日本のキリスト教思想家たち』三九〜四〇頁
- (16) 前掲『高倉全集第十卷 日記・書翰』三九二〜三頁

参考文献（注の中にあげたものを除く）

- 『高倉徳太郎著作集』全五巻の解説、一九六四、新教出版社
- 『信濃町教会七十五年史』一九九九
- 岡田美須子「高倉先生のこと 小塩力「高倉徳太郎伝」について」『福音と現代』一号、一九七一